

主イエスのいのちにあずかった私たち

2007. 11. 20 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ローマ人への手紙 4章24、25節

また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

5章1節

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

5章10節

もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

6章4節

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

6章6節

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

今朝ちょっと読んだ本の話ですが、ある墓地の墓石に、亡くなった人の名前が刻まれていて、いつ生まれたのか死んだのか、それは何も書いてなかったそうです。名前だけです。けれど一つの言葉が書き添えられていて、「赦された」と。それだけだったのだそうです…。名前と、「赦された」という言葉。これこそ最高の内容と言えるのではないのでしょうか。生きている現在の時点でははっきり理解できなくても、やがて永遠にわたって「赦された」という事実のために、感謝せざるを得なくなります。

パウロは、
エペソ人への手紙 1章7節前半

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち、罪の赦しを受けているのです。

と。

「私は罪の赦しを受けている」と言える人は、本当に幸せではないでしょうか。今朝の題名は、『主イエスのいのちにあずかった私たち』、或いは『十字架につけられた私たち』とつけたいと思います。

どうして、「赦される」のでしょうか。それは、「イエス様の血」が流されたからです。いつの時代でも、悪魔はイエス様の血による贖いの大切さを、曖昧にしようと必死になってきました。

例えば、統一教会があります。この統一教会の原理公論という教典は、イエス様の血について一言葉も語っていないのです。韓国人である文鮮明は何と言っているかといいますと、「キリストが十字架につけられたことは大失敗だった。キリストが失敗したから、私が代わりに遣わされた。私は1960年、悪魔に打ち勝った」と。また、イスラム教徒のコーランの中では何と書かれているかといいますと、「イエス・キリストは十字架の上で死ななかつた」。そうすると、キリストの血も流されなかつたということになります。しかし、聖書の中には、血を流すことがなければ罪の赦しはあり得ない、と書かれています。(例えば、コーランや原理公論にはこの記述はありません。)
「イエス様の血」による以外に救いはなく、罪の赦しもないというこの真理から、遠く離れてしまっているのです。彼らは、「イエス様の死」と「イエス様の苦しみ」がイエス様の使命だった、とはもちろん考えていませんし、考えようともしません。そして、「イエス様の死」は罪の赦しと救い的手段ではなかつた、と平気で言っています。

では、聖書は何と語っているのでしょうか。私たちにとって最も大切なことは、自分の考えは大切ではないということです。「みことばが何と言っているか」です。

イエス様は、
マタイの福音書 20章28節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである・・・」

と。流された血とは、与えられたいのちのことです。

イエス様の弟子であるペテロは、
ペテロの手紙・第一 2章24節

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私た

ちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

3章18節

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。

またパウロは、次のように書き記したのです。

ローマ人への手紙 5章10節

もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

4章24節、25節

また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

5章1節

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

へブル書の中に、イエス様の来られたもう一つの目的について書かれています。

へブル人への手紙 2章14節、15節

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つものを滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

もう一箇所。

コリント人への手紙・第二 5章17節から21節

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神

が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。

このことばは、私たちがそれを受け入れようが受け入れまいが、動かすことのできない事実であり、真理そのものです。すなわち、「罪の赦し」は、ただ「イエス様の流された血」によってのみ完成されました。罪に対する完全な勝利は、「イエス様の血」によってもたらされたのです。「罪」の問題は、「イエス様の血」なくしては解決されないのです。「イエス様の血」によって、罪が赦され、罪に対する勝利がもたらされただけではなく、将来の「新しいのち」に生きる可能性も約束されています。

黙示録の最後のほうに書かれている素晴らしいことばです。

黙示録 21章5節

すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

「見よ」とは、わたしを見なさいということです。

「見よ。わたしは、…する」。人間がどんなに努力してもできないからです。「わたしは、すべてを新しくする」とは、罪と債務の重荷となって、永遠の滅びに沈んでいく人間に対するイエス様の提言です。そしてこのみことばは、イエス様の十字架の死によって実現されました。それこそすべてのものが新しくなったという事実そのものです。

イエス様は全人類の債務を、ご自身の血によって支払ってくださいました。ですから、「罪の赦し」が実際に成就されたのです。そしてイエス様は、私たちが罪の奴隷から贖い出してください、完全な自由を与えてくださったのです。私たちはイエス様の中に、悪魔と罪の束縛からの解放と、罪に対する勝利を見出すことができます。

イエス様はさらに、それ以上のことをもなしてくださいました。すなわち、イエス様は「ご自身の血」によって、私たちに「新しいのち」を与えてくださったのです。イエス様はいつも、「わたしは豊かないのちを与えるために、わたしのいのちを捨てる」とおっしゃられたのです。イエス様の恵みによって救われた人たちは、たしかに罪の赦しを与えられ、罪に対して勝利をいただきましたが、もし「新しいのち」をいただいていなければ、元の状態にとどまるのみか、さらに悪い状態になってしまうかもしれません。「イエス様の血による救い」が永遠に続くため、またそれが実際生活に現われてくるために、私たちは「新しい人間」とされなければなりません。

イエス様は、「見よ。わたしは、すべてを新しくする」と語られました。イエス様は全てを新しくすることがおできになり、新しくすると約束してくださっています。

新しい人間になりたいと思いませんか。そして新しい人間となって新しい生活をしようと思いませんか。もちろんみなさんはそれを望んでいることでしょう。それこそ、最も深い自分の願いではないでしょうか。今まで、新しくなろうと思って一生懸命に努力したが、それが空しかったことを誰でも認めざるを得ないでしょう。なぜなら自分の力で、新しい人間になったり、新しい生活を展開していくことはできないからです。できることはただ、イエス様にすべてを明け渡して、イエス様によって新しく造り変えていただくことだけです。私たちの生活がイエス様のみこころにかなった生活となることを、体験すべきではないでしょうか。

イエス様は、私たちを新しい人間に造り変えたいと思っておられるだけではなく、またそれがお出来になるただお一人の方です。もし新しい人間になりたいと思うなら、古い人間を捨てて、「古き人」から離れ、新しい生活に入らなければなりません。

私たちは、「古い人」である自分の生まれつきの性質をよく知っているでしょう。古い人間の中にある古い性質は、いつも自分のことだけを中心に考えようとしめます。たとえ自分自身の中にある古い性質に気がつかない人でも、他人の中に自己中心的な古い性質があることを、よく知っているでしょう。聖書が語っている「古き人」とは、自己中心的な考え方ができない自我の塊、いつも周囲の人々を支配しないと気がすまないという人です。古き人の特徴は、自己決定と自己支配です。

どのようにして私たちは、古い性質から解放されるのでしょうか。それに対しては禁欲主義的な、律法的な処方箋が、いろいろな宗教によって行なわれ、語られてもいますが、実際問題としてそのような律法的な処方箋の結果は、更にひどく自己中心的な人間を造り上げてしまうことが少なくありません。そして人間は以前よりも自分中心な考え方をするようになってしまうのです。

イエス様は、そのような「古い性質」から解放するために、はるかに素晴らしい方法をご存じです。聖書によると、イエス様の十字架の死は、イエス様ご自身の死と関わりを持つだけでなく、「全人類の死」が関わりを持っているのであり、私たち自身の死も同時に含まれているのです。イエス様は私たちのために死なれたのです。それゆえに、古い人間もともに十字架につけられた、とあります。

先ほど司会の兄弟が読まれました、ローマ書6章6節をもう一回読みましょう。

ローマ人への手紙 6章6節

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

しかし多くの方は、この事実の深い意味を知らず、毎日の生活に追われて忘れているのです。イエス様は二千年前に私たちの古き人とともに十字架につけられました。イエス様が十字架につけられたと同じように、私たちのうちの古き人もともに十字架につけられたのです。十字架につけられたイエス様を信じる者は、私たちのうちの古き人もキリストとともに十字架につけられた事実を体験的に知らなければなりません。

ですからそうすると、私たちのうちの古き人は、もはや存在する権利を持っておらず、その要求に従うことはない、という自覚をもって感謝の生活をする事が出来るのです。

すなわちパウロが証ししているように、『私はキリストとともに十字架につけられた。もはや私が生きているのではなく、イエス様が私のうちにおられるのです。(ガラテヤ2:20)』と言うことができるのです。そのとき初めて、私たちは罪から解放されて自由を得ることができるのです。そして、イエス様とともに十字架につけられた者は、イエス様とともによみがえったのです。すなわちイエス様は、私たちが主イエス様の死にあずかることだけでなく、「イエス様のいのち」にあずかることをも望んでおられます。

自我を消し去ってくださる方はイエス様であり、それがイエス様の提供された、私たちに対する贈り物です。そして新しい性質の現われは、イエス様が与えてくださった新しいいのちの結果です。イエス様だけが、「わたしはいのちそのものである」と言うことがおできになりました。そして、「まことのいのち」つまり「永遠のいのち」は、ただイエス様の中にだけあるのです。しかもイエス様はそれをご自分のものにしておかれず、地上にお生まれになって、私たちに「ご自分のいのち」を与えようと望んでおられるのです。

ヨハネ伝10章10節。よく読まれる箇所です。

ヨハネの福音書 10章10節

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」

「いのちを得」、もちろん「永遠のいのち」「主ご自身のいのち」です。

28節

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」

素晴らしい約束です。イエス様が私たちにいのちを得させるためには、ご自分のいのちをお捨てにならなければならなかったのです。イエス様はそのために死ななければなりませんでした。そしてそのことを、イエス様は実際になしてくださったのです。

イエス様のいのちは、「イエス様の血」にあります。「イエス様の血」が流されたとき、私たちにイエス様のいのちが与えられました。

ヨハネの福音書 10章18節

「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」

と。

イエス様がいのちを捨ててくださったので、私たちはそれを受け取ることができます。それゆえ、十字架こそいのちの泉が流れ出るところです。誰でもそれを受け取る意志さえあれば、ただで得られます。黙示録の22章17節に、次のように書かれています。

ヨハネの黙示録 22章17節

御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

「永遠のいのちがほしい者はどうぞいいですよ」と。「ただなのです。受け取りなさい」と。十字架につけられたイエス様を受け入れた者は、イエス様こそ「自分の救い主」また「自分の主」であられ、「罪の赦し」「罪の支配からの解放」をしてくださるだけでなく、「新しいいのち」までも与えていただけるのだ、と確信するようになるのです。

聖書の最も大切なことばの一つです。

ヨハネの手紙・第一 5章12節前半

御子を持つ者はいのちを持っており…

「御子を持つ者」、主イエスを持つ者です。

永遠のいのちとは、物ではありません。「イエス様ご自身」です。ですから、悔い改めてイエス様を受け入れた者は「永遠のいのちを持っている」、と聖書は語っています。それはなかなか理解できないかもしれません。また、感じることもできないかもしれません。私たちには信じられませんが、聖書がそう語っているので、安心して信じ、感謝することができます。「永遠のいのち」とは「新しいいのち」です。そのようにして、イエス様は私たちが新しくしてくださったのです。

もう一度、始めに読みましたローマ書6章4節をお読みいたします。

ローマ人への手紙 6章4節

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。

「キリストの死にあずかるバプテスマ」、これは洗礼の水ではないのです。

これは、聖書が語っている「新しい生まれ変わり」です。新しいいのちを持ちたいと思っている人は大勢いますが、悔い改めて、新しく生まれ変わることでできる人は少ないのではないのでしょうか。「新しいいのち」は、「新しく生まれ変わる」ことによつてのみ得られます。

イエス様の時代の聖書学者たちは、だいたい嘘つきであり、偽善者でした。けれども、「永遠のいのちが欲しい」と言つて、正直に求めた聖書学者もいました。ニコデモという男です。ヨハネ伝3章に書かれています。彼がイエス様にそのことを尋ねた時のことです。イエス様は、「誰でも、新しく生まれ変わらなければならない。あなたの知恵と博学の知識は何の役にも立ちません。あなたが今までたくわえた聖書の知識も。『新しい生まれ変わり』がなければ、決して天国に入ることができない」と、はっきり彼におっしゃつたのです。聖書をずっと読むと分かります。彼はそれを受け入れたのです。彼はイエス様との出会いによつて、「新しいいのち」を持つようになったのです。

多くの人たちは、自分は正しくまじめに生きているから、主なる神に義と認められて天国に入れる、自分はいろいろ良いことをしたので天国に入ることができると考えています。これはいわゆる宗教の悪い影響です。聖書は何といっているのでしょうか。「人間が考えることと、主が判断なさることの間には大きな違いがある」と言っています。

ですから、イエス様は大聖書学者であるニコデモに、次のようにおっしゃつたのです。
ヨハネの福音書 3章3節

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

もちろん入ることもできません。例えば、私が、ドイツで日本と同じように左側通行で車を運転したなら、おそらく5分も経たないうちに正面衝突するでしょう。そして裁判のとき、日本では車が左側を走るからドイツでも左側を走つたのであつて、私は間違つていないと主張しても、裁判官はそれを認めないでしょう。ドイツでは車は右側を走る規則である以上、日本で行なわれていることが通用しないからです。それと同じように、私たちが主の前に立たされる時、主は、私たちの人間的な思いや考え、定めによつてではなく、主の律法によつて裁かれるに違いありません。

聖書は、主なる神が考えていらつしやることを、私たちに明らかにする唯一の書物です。聖書は、「救いの扉はただ一つ」すなわち「イエス様ご自身」である、とはっきり語つていふのです。債務が支払われ、罪が覆われるためには、尊い犠牲、すなわちイエス様の血がどうしても必要でした。新しい永遠のいのちは、ただ、回心によつて、すなわち「新しく生まれ変わる」ことによつてのみ、与えられるのです。

永遠のいのちを得たい、と思う人は必ず与えられます。『求めなさい。そうすれば与えら

れます。(ルカ 11 : 9)』と約束されているからです。

イエス様ご自身の流された血が必要です、と私たちも切に望むなら、新しいいのちを、また永遠のいのちを与えられるのです。けれどそれは私たちにとって簡単なことではありません。なぜなら、何十年も人生経験を経た人が、幼な子のようにもう一度初めからやり直すということはなかなかできないからです。もっと正確に言うならば、したくないからできないのです。たしかに、イエス様を知らずに生きてきたことは、空しいことでした。しかし、今からでも決して遅すぎることはありません。もし今イエス様の恵みにあずかることができれば、何と幸いですでしょう。もう一度新しくやり直すことは、それ自体、恵みにほかなりません。過去の出来事が、「イエス様の血」によって赦され、忘れられることこそ、完全な自由を意味しているのです。新しく生まれ変わった人間は、生まれたばかりの幼な子のようなものです。すなわち、その人は暗い過去を持っていません。

最後に、イエス様によって新しく造られた者となった人を、聖書の中から探しましょう。
マルコ伝 10 章。有名な話です。

マルコの福音書 10 章 46 節から 48 節

彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆と一緒にエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫びたてた。

49 節、50 節

すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。

イエス様はいつも聞く耳を持つお方です。祈りを必ず聞いてくださるのです。

51 節、52 節

そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

イエス様はご存じなのに聞かれたのです。イエス様はどうして聞かれたのかといいますと、彼が信じているかどうかと。信じると神の栄光を見るからです。

盲人はイエス様の弟子になりました。イエス様は考えられないほど多くの人たちを癒し

てくださったのですが、イエス様の弟子になった人はあまりいなかったのです。「健康になって嬉しい。はい、さよなら…」と。

イエス様は、一時的な問題を解決しようとしてされているのではなく、永遠なるものをお与えになりたいのです。体が元気になっても、いつか死ななくてはなりません。時間の問題だけなのです。根本的な問題の解決ではありません。イエス様はなぜ人を癒されたかといいますと、旧約聖書の預言を成就するためだけなのです。旧約聖書の中で、「約束された救い主が現われると病人は癒される」と預言されていたからです。イエス様は一度も、「無理です。先週来たなら何とかなつた。もう手遅れです」とおっしゃったことがないのです。四日間も墓にいるラザロでさえも、お呼びになられたのです。『ラザロよ、出て来なさい。(ヨハネ11:43)』結局イエス様は、旧約聖書の預言を成就するためにだけ、病人を癒されたのです。病人がかわいそうだからではありません。イエス様は人間に対して同情なさいません。しかし、現代の多くの親は、わがままな自分の子どもに対して同情します。それは間違いです。愛の塊であるイエス様は、同情なさいません。それは私たちを愛しておられるからこそです。一時的な問題の解決は本当の意味での解決ではありません。ですから、愛の現われとして主は、いろいろな問題、苦しみ、悩みを与えてくださいます。

この盲目の乞食であるバルテマイは、まったく平安も、喜びも、希望も持っていませんでした。けれどイエス様は彼をお呼びになりました。人々は彼に、「喜べ、立て。お前を呼んでおられる。心配しないでよい」と。

この招きのことばは、私たちにももちろんなされています。人間同士の間でも、「くよくよするな、元気を出しなさい」などと励まし合ったり力づけてたりしますが、実際には助ける可能性と本当の力がないために、うわべだけのもので終わってしまうことが少なくありません。人間的な同情は、一時的な気休めになるかもしれませんが、決して根本的な問題の解決にはなれないのです。イエス様は単に私たちの苦しみに関心を持っておいでになるだけではなく、根本的な問題の解決を与えてくださるお方です。そのようなお方がおられることは、まさに福音そのものです。もちろんそのお方とは、十字架の上で犠牲になられた主イエス様にほかなりません。

実際問題として、多くの人々がバルテマイと同じように盲目であり絶望的な状態にあるということ、イエス様はご存じです。たしかに、私たちも肉眼を持っています。外側はきちんとしていても、心の奥底に本当の平安、まことの喜び、生きる希望を持っているでしょうか。イエス様を持たない者は、心の目が見えないため、手探りで暗やみの中を這いずり回り、何かを求めようとしますが、結局恐ろしい「死」に向かっているのです。

いかなる状態におかれても、どんなに勇気を失っても、イエス様が私を呼んでおられるということ、絶えずおぼえるべきです。今、暗やみの中に沈んでしまっているかもしれませんが、自分を呼んでおられるイエス様をどうしても知る必要があります。そうでなけ

れば、本当の光を求めようとはしないでしょう。

バルテマイはテマイの子でした。そして、テマイは聖書に書かれていることから推し測れば、その当時非常に有名で立派な人物だったようです。その時既にテマイは死んでいたに違いありません。偉大な父親といえども、盲人の息子を助けることができませんでした。名誉や地位を持っていたとしても、決して、私たちの無力さ、惨めさを変えることはできません。

イエス様の目からご覧になれば、新しく生まれ変わっていない者は誰でも、バルテマイのように盲目です。けれど、バルテマイは、新しく生まれ変わるために、周囲の人の噂やことばを恐れず、それをまったく無視しました。

イエス様のみもとに行くために、あらゆる妨げとなるものを退けなさい。あなたは、「イエス様のいのち」を持っていない、いわゆるクリスチャンに失望したかもしれませんが、イエス様のみもとに行くためには、いただいた「新しいいのち」の障害となるものを捨てるべきです。バルテマイが上着を脱ぎ捨てて、イエス様のもとに行ったように、私たちもあらゆる障害物を投げ捨てて、イエス様のもとに行きましょう。うわべだけの信心ぶった見せかけや、嘲笑や、自己正当化を捨てましょう。

イエス様は、今日も私たちに向かって、バルテマイに対するのと同じように、「何をしてほしいのか？」とたずねておいでになります。

イエス様は次のようにたずねておられます。

- ・あなたは、目を開いてほしいのか？
- ・あなたは、自分の手柄ではなく、十字架においてわたしが成就した救いを受け取ろうと思わないか？
- ・あなたは、わたしの血による罪の聖めが欲しいか？
- ・あなたは、わたしの霊があなたの生活を完全に支配することを望んでいるか？
- ・あなたは、わたしがあなたに完全な救いを成し遂げたことを信じたいと思わないのか？
- ・あなたは、そのままで罪の中に死にたいと思うのか？
- ・あなたは、わたしを退けるのか？
- ・あなたは、わたしがあなたを高い代価を支払って買い取ったという事実を拒む者か？
- ・あなたは、永遠のいのちという素晴らしい贈り物を本当に受け入れたくないのか？

と。

イエス様はそのようにたずねておいでになりますが、救いの確信を持つようにとも望んでおいでになります。もし、イエス様を受け入れるなら、イエス様は必ず心の目を開いてくださるのです。

「喜べ。立て。おまえを呼んでおられます」。

最後に、二箇所読んで終わります。

イザヤ書 42章16節

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。
彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、
彼らを見捨てない。

ヨハネの福音書 8章12節

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、
決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

了